プロレタリア文学による炭鉱の編成
―「坑内」からプロレタリアートとしての闘争へ―

奥村華子

（日本文化学専門/博士前期課程）

1. はじめに

炭鉱や炭坑夫を題材にした表象において、プロレタリア文学はひとつの転機である。石炭を取り巻く言説を広く概観した池田浩士の先行研究では、功績として炭鉱を初めて「外の世界」と結び付けたことが挙げられている[1]。日露戦争から第一次世界大戦以降の石炭算出の要請増加に伴い、それまで一般の労働者とは隔たりがあると理解されていた人々が社会的に意識され始めたことを背景に、プロレタリア文学によって、彼らにまつわる労資関係は公の問題として提出された。池田の指摘では、炭鉱での労働経験のある橋本英吉やモダニズム詩人である三好十郎を例に、重要な示唆が与えられているものの、これらの作家を中心とした炭坑夫自身による表現、あるいは炭鉱労働の特殊性の表現という観点からの考察に留まる部分がある。本稿では、プロレタリア文学が炭坑夫をプロレタリアートという共同体として編成しなおす際の力学、とりわけ炭坑夫をどのようなイデオロギーに組み込み、どのような闘争に導こうとするかということを軸に、その言語表現の特徴を明らかにする。

2. プロレタリア文学をどのように捉えるか

2.1. これまでの研究史から

栗原幸夫によれば、「プロレタリア文学」はこれまでにただの一度も存在したことは無い。あったのはプロレタリア文学「運動」下における作品のみで、理論と運動と作品との三位一体の至高点に政治があること、

[1] 池田浩士『石炭の文学史』インパクト出版、2012年、p. 71。

つまり根本には「政治の優位性」が存在するものであるという[2]。プロレタリア文学は、1921年の『種蒔く人』の創刊によって萌芽を迎え、その後『文芸戦線』や『前衛』、『戦旗』といった政治的思想を一にする団体の機関紙の変遷とともに生成されたものと理解されている。運動成立当時から文学性を欠いた政治的思想の手足に過ぎないとの批判を受け、研究史においても祖父江昭二が指摘するように、組織や運動の問題性を追求する研究は多いものの、作品分析を基礎にした試みは少なく文学運動史はあっても文学史がないというような状況が続く[3]。そのため具体的な表現への言及は、同時代の新感覚派との類似や、表現主義やダダイズムの出現との世界的同時性、関東大震災といった大規模な社会的変容など、プロレタリア文学が受けた影響の指摘に終始していた。2000年に発表された荒俣宏の読み替えかえや[4]、2008年の『蟹工船』のリバイバルヒットから、プロレタリア文学の特徴的な表現に着目する機運が高まり始め、日本の格差社会を照射するような現在的意義を探ろうとする動向も生じているものの、いまだ断片的な考察に留まる部分が多い。

上述のような背景の中で、炭鉱を題材としたテクストにはその労働の特殊性を真に迫ったものとして伝えるために、前衛的とも評されるような、プロレタリア文学総体からみても鮮烈かつ斬新な表現が見られる[5]。炭鉱とプロレタリア文学という二点固定における表現の考察には、表現自体にほとんど言及されてこなかったというプロレタリア文学研究の現状においても、炭鉱や炭坑夫の表象においても、検討の意義があるだろう。次節からは、雑誌『戦旗』に掲載されたテクストを例に考察を行う。

2.2. 雑誌『戦旗』の伝播

1928年に創刊された雑誌『戦旗』は、全日本無産者芸術連盟(ナップ=NAPF,Nippona Proleta Artista Federatio)の機関誌として発行され、日本

---

[2] 栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代 増補新版』インパクト出版、2004年、pp. 4-5。
[3] 祖父江昭二「プロレタリア文学」『国文学 解釈と教材の研究 6月臨時増刊号』第13巻第8号、1962年6月、p. 48。
[4] 荒俣宏『プロレタリア文学はものすごい』平凡社、2000年。
[5] 池田、注1と同掲書、p. 139。

共産党の下「思想的・政治的影響の確保・拡大」[6]という目的意識に従って労働者や農民への直接的アジテート、労働者階級の多数獲得をねらう直接的媒体として目されたものだ。特徴としては、「直接配布制」という「もっとも密接に労働者階級につながっていた時期」[7]を創出した、と指摘されるような配布網の存在がある。直接統制の下、それまでの支部取次部、および読者会を支局に組織し、本部から直接送られてくる雑誌を支局が受け取り、その後支局の構成員が秘密裏に各職場での分配を手分けすることで、読者会の拡大をはかった。1929 年の 4 月に支局制が確立してから漸次的に増加した発行部数は、1930 年 7 月に最大の 2 万 3,000 部を獲得しており、労農芸術家連盟の機関誌で刊行時期の重なる『文芸戦線』の最大発行部数がおよそ 2 万部であったと推察されることからも[8]、『戦旗』の読者数は比較的多数かつ安定したものであったといえるだろう。1928 年 5 月の創刊から 1931 年 7 月までに発刊された 44 号のうち実に 31 号分が発売禁止処分、または発売禁止以前の押収を受けていた『戦旗』にとって、検閲を逃れ安定して読者の手に渡るためにはこの「直接配布制」が不可欠であり、日本だけでなく朝鮮、台湾の読者にとって、『戦旗』を獲得すること自体がプロレタリアートとしての能動的闘争かつ読者共同体の意識を強固にするものだったのである[9]。日本共産党の指導方針および雑誌の伝播過程においても、上述のように強固な共同体意識を繋いでいく役目を担った媒体において、どのような表現が炭鉱での労働者の姿を形成し、読者に共有されたのか。

3. 炭鉱の表現について

3.1. プロレタリアートとしての炭坑夫

前述のように、プロレタリア文学は炭鉱を表現したという功績を持つ

---

[6] 栗原幸夫、注 2 と前掲書、p. 93。
[7] 同上、p.94。
[8] 鶴田知也「『文戦』についての断片」『文芸戦線（後期）別巻』（復刻版）戦旗復刻版刊行会、1983 年、p. 25。
[9] 高榮蘭「『社会主義』と『転向』をめぐる文化政治――一九三〇年前後の『社会主義』書物をめぐる競争／狂騒をてがかりに――」『特集 移動と空間の想像力』(2015 年 10 月 24 日に開催された日本近代文学会秋季大会の発表内容を参照した。)

一方、炭坑夫をその他の労働者と同一のものとして扱うことの問題も指摘されるものである。その根本にあるのが、社会学の方面から夙に指摘される炭鉱労働を含む鉱山労働の特殊性で、以下では先導として遠藤正男による見解を整理する。

遠藤によれば、炭鉱労働を含む鉱山業とは、昔からある産業の中で最も早く近代的労働者が現れたものであり、またその労動の特殊的性質のため封建的残存物を最も長く遺したものであるという[10]。「労働の特殊性」とは、石炭という燃料の社会的重要性から多くの労働力が「隷属的な賃金労働」[11]によってつなぎとめられていたこと、また鉱山業という労働そのものが深山における危険労働であったことを指している。「都市や農村部落の生活より切り離された山中に於ける労働生活は、炭鉱夫をして一般人と異る言語・習慣・性質を生み出さしめ、この地理的孤独がまた雇用者と被雇用者との特殊関係を規定し、特殊の封建的拘束による労働者の奴隷化」[12]を作りだすに至り、そのため鉱山業に従事する人々は意識の上でも社会的地位においてもまたそれを背景に、中世から通底するものとして、「頗る賤しく貧しき階級」[13]という社会通念の下で長く認識される。

このような社会関係を描き出そうとする時、「プロレタリア文学はいわばプロレタリアという人間像のはるか手前まで、そして公式マルクス主義にもとづくプロレタリア革命の構想のはるか彼方まで、描きうるような想像力を必要とせざるをえない」[14]という。いわばプロレタリアートとして想定される労働者よりもさらに「下層」に位置する炭坑夫においては、その労資関係だけでなく、人々のあいだに根付く社会通念そのものにも変革を起こさなければ、状況の本質的変化はないということに、池田はプロレタリア文学の問題を指摘するのである。

プロレタリアートとして編成されようとする炭坑夫の姿は、炭鉱の現

---

[10] 遠藤正男『九州経済史研究』日本評論社、1942年、p. 135。
[11] 同上、p. 139。
[12] 同上。
[13] 同上、p. 138。
[14] 池田、注1と同掲書、p. 73。

状に根差すこの問題をたしかにはらむものだろう。それではプロレタリアートとしての炭坑夫が提示されるためには具体的にどのような力学が用いられたのか。以下は『戦旗』1929 年 3 月号発表の「二つの行列」冒頭部の引用である。

実炭車(みどろ)が吹飛むだと
鎖(チェーン)が断れてか！
クリツプが外れて
実炭車が吹飛ぶだと

薪割る斧を投つて
伜の寝巻(どてら)を抱へ
担架よりも　早く
現場へ
駆けつけねば……

第二運搬坑道
急勾配の線路(レール)は曲つて
人間を　轢き潰した
実炭車
坑木に　突き当たつて
石炭を吐き出し
折重つて
——転覆してゐる
真暗闇の静寂

仲間のカンテラが慄いてゐる
医者の白い上着が蹲つてゐる

伜の死目に逢はしてお呉れよ！

伜の肉を拾はしてお呉れよ！

仲間達は　立塞がつて
優しく
母親を　遮る
心配するな阿母！奴は生きて[15]

「炭山（やま）の一労働者」なる作者を付されたこの詩は、「実炭車（みどろ）」という石炭を積んだトロッコの暴走による一人の炭坑夫の青年の事故死からその遺体が坑内から担ぎ出されるまでの様子が、時間経過に比例して、急速に拡大していく視点によって語られる。この詩においては、引用 1・2・5 連の事故を知った青年の母の言葉や、3・4 連の事故を語る三人称、また 6 連の同じ炭坑で働く仲間の声のように、複数の声がコラージュのように繋ぎあわされている。一連の出来事を主に描写するのは三人称による語りであるが、合間に炭鉱での青年の事故のほか 3・15 事件を想起させるような呼びかけや、10 月革命を迎えたロシアへ呼びかけるように、昭和天皇の即位の御大典を祝う様子が挿入される。「二つの行列」とは、この御大典に際して打ち振られる日の丸提灯の群と、この奉祝からは隔絶してひっそりと進む遺体を担いだ一列のことを指す。読者に「見ろ！／崖下の街道を／――日の丸提灯が／見ろ！／肩の担架を／――「断固たる決心」が」と呼びかける三人称の語りは、このふたつを包括して見ることのできる視点を持ち、最終部において「大空に／無数の眼は　輝き／眺めている――二つの行列を／紀元二十有余年は愚かな夢に過ぎぬ」と断罪しながら、擬人化した星によって鳥瞰的に炭鉱を見下ろす読者の視点を暗示する。自身と同一化した高次の段階まで読者を引き上げることで、社会から隔たった炭鉱を認識する視野と、同時にプロレタリアートという共同体に沿う姿勢を読者に要求している。つまり「炭山の一労働

[15] 炭山の一労働者「二つの行列」『戦旗』第 2 巻第 3 号、1929 年 3 月、pp. 46-50。※原文通りに表記するため、空白を一部使用した。以下、本論では原文に空白箇所がある場合は、同様に空白を使用する。

者」という作者名の明記は、ローカルな場所から発せられた訴えを強く印象づけながらも、その語りの視野は極めて広くプロレタリア文学運動全体を考慮に据えたものなのである。

母親にとっての「伜」、坑夫らにとっての「仲間」、無数の眼にとって闘争に向かうための「断固たる決心」と青年の呼び名が変遷するのに従い、炭鉱で息子を失った母親の悲しみから始まったはずのこの詩では、最終部において青年の死は極大まで抽象化され、炭鉱ではなく「職場」、炭坑夫ではなく「プロレタリアート」の死として、闘争に対峙するあらゆるプロレタリアートに通底する決心へと昇華されている。青年の遺体を運ぶものと、御大典との二つの行列が「それぞれが別の大義に従っているという違いしかないものになってしまいかねない」[16]と池田が危惧するのは、テクストにおいては「×」という伏字で示される「党」のもと、炭鉱から発された苦しみが、例えば「二つの行列」における抽象化の陰に捨て置かれてしまうことを指す。解放闘争を掲げる運動内部にはこのような「難問」[17]が根をはり、これを突破するために、三好十郎のような稀有な作家が前衛的表現を試みるのがプロレタリア文学である、と池田は指摘するのである。

しかしプロレタリア文学の表現には、イデオロギーや社会通念から逸脱して炭鉱の生の姿が描かれている可能性がある。そして悲惨な現実を捨象するのみならず、炭坑夫の苦しみをばねに結実しようとする闘争の性質も、たしかにその言語表現において確認されている。

3.2. プロレタリア文学における比喩表現について

以下では、主に鉱山と炭坑夫の比喩表現から、他のプロレタリア文学テクストとの比較を通した考察を行う。

プロレタリア文学においては、搾取を描写する際に、本来は人間が使用する側であるはずの機械や道具との関係が逆転している例が少なくない。『戦旗』からいくつか例を挙げると、「工場の門／見ろ見ろ青い顔した兄

[16] 池田、注 1 と同掲書、p. 152。
[17] 同上、p. 150。

弟が／搾取機の中に吸込まれて行かあ／この中で十二時間も生血を搾られんだ」[18]、「搾り×すためには搾り×す稽古を」、「工場の中では俺らは機械にくゝりつけられてあり／機械が回転し／俺らが回転し／俺らは引きずりまはされ／眼をまはされ」[19]というように、まるで機械のほうが主体であるかのように、労働者が支配され、使用されるような労働現場の表現として用いられている。

無生物の動作の対象という点で共通する例として、ガス爆発を発端に炭坑夫が闘争へと向かうさまを描いた橋本英吉「ガス！」がある。そこでは、坑内で爆発が起こったという知らせを聞いたひとりの坑夫がつぶやくひとことに、「また、人間を束して殺しやがつた。……こりゃ一体、どうしたんだ……。」[20]というものがある。ガス爆発や炭塵爆発といった坑内での事故は、明治 8 年の高島炭鉱でのガス爆発以来、九州から本州、北海道に至るまでの多くの炭鉱において頻発してきたもので[21]、坑夫のつぶやきに「また」とあるのも、このような社会状況を如実に示したものといえるだろう。実際に炭坑夫を死に至らしめるのは事故であるが、このつぶやきの先にある明示されない「人間」を殺した主体の箇所には、頻発する爆発の危険性を知りながらも坑内の安全対策を怠っていた会社の存在がある。その上で「人間を束にして」という箇所を読みなおすと、まるでダイナマイトを使用するかのように、石炭を掘り起こすために束になって使いつぶされる炭坑夫の姿が想起される。

また、「ガス！」における爆発の直接的な描写は以下のようになっている。

> 坑夫は口をあけ、白い歯をかんだまゝ倒れた。牛のやうに強い肩を持つた男は、倒れかゝつて来た枠を、ガツシリと両手で支へたまま窒息した。広い胸の間に光つてゐた汗は、長い間そこから消えな

---

18 吉田節俊「搾取機」『戦旗』第 1 巻第 3 号、1928 年 7 月、p. 168。
19 田木繁「搾り×すためには搾り×す稽古を」『戦旗』第 2 巻第 9 号、1929 年 9 月、p. 168。
20 橋本英吉「ガス！」『戦旗』第 3 巻第 13 号、1930 年 8 月、p. 173。
21 上野英信・編『近代民衆の記録 2 坑夫』新人物往来社、1971 年、p. 453。

かつた。その横には塊炭で頭を打たれた彼の運搬夫が、呻き声をあげていた。

二つの盛り上がつた乳房が、地面に乳首をつけてゐた。其の横には、彼女の夫が座つたまゝ窒息してゐた。二つの肉体は焼けてはゐなかつた。だが、夫の眼は空にあいたままであり、手に鶴嘴の柄があつた。女の押しつけられた乳房からは白い汁が流れてゐた。七時間前までは、彼女の赤ん坊が、そこに唇をつけて笑つていた。七時間の間に、彼女の乳房は乳で一ぱいになつてゐたのだ。若し、ガスが恐ろしい勢ひで母の命を奪つて行かなかつたら、彼女は坑口から湯にも行かず、真直ぐに託児所に行つて、汚れた乳首を子供に含ませることが出来るのだつた。二人は何処にも傷はなかつた。まだ生きてゐて、一休みしてゐるやうにも見えた。[22]

映画のコマが切りかわるように、淡々と爆発の広がりが描写されたのちの炭坑夫の死である。1914 年 11 月 28 日に起きた炭坑の爆発事故に関する新聞記事を集めた資料である「炭坑爆発誌」[23]を見ると、「噫熱火地獄」などの見出しが付けられた記事で、坑内の死体収容の作業に従事する人物のインタビューなどから、死体の損傷の様子がまざまざと、「ガス！」よりも凄惨な表現で、事細かに描写されている。また、『戦旗』においては、1929 年 9 月号に歌志内炭鉱の爆発を扱った次の様な記事が掲載されている。「北海道歌志内の炭坑が爆破した。そうして四十幾人といふ労働者が逃れるヒマもなく、ガスにむせび煙にまぎれて蒸し×された。資本家は、火の出た穴を密閉してしまふ。労働者よりも石炭が大切だといふのだ。だが労働者が×ち×る時はそれが逆になる」[24]。

悲惨な事故を広く社会に問う記事や炭坑夫と一般の労働者を同一のものとする表現と、「ガス！」における特徴的な爆発の描写との隔たりは、何に由来するものであろうか。胸の間に汗を残したままであったり、子

[22] 橋本、注 18 と同掲書、pp. 170-171。
[23] 上野、注 19 と前掲書、p. 453。
[24] 「歌志内炭坑の爆発」『戦旗』第 2 巻第 9 号、戦旗社、1929 年 9 月、p. 5。

供に与えるはずだった乳を流していたりするきれいなままの死体の姿は、「下層」の人々の生の姿を訴えることによって、日常に潜む死の危険を当然のものとはしない。「ガス！」における表現は、炭坑において頻発する事故という社会状況や使いつぶされる炭坑夫という認識によって形成され続けていく社会通念を打開する可能性を持つのである。ダイナマイトを想起させる人々を「プロレタリアート」でも「労働者」でもなく、わざわざ「人間」とするのは、一般化の媒介としてではない。「人間」と呼称しなくてはならない必要性は、およそ人間らしくないほどの環境に炭坑夫の人々が置かれていたということ、またそれが社会通念として広く解されていたというところにある。ダイナマイトという鉱山労働を代表する表現の担った特性は、3.3 で検討するが、本節では先に人間を比喩する表現についてプロレタリア文学での用例を挙げる。

人間を何かに模す、ということについては、資本家からの搾取の様相と、闘争へと向かうプロレタリアートの姿に共通点がある。圧制や搾取の例として、比喩によって人間を表現したものには、「××ツてところは、俺たちを漬物の菜っ葉みたいにしちまうんだなあ」[25]、「娘は枯木のやうに痩せこけて死んだ。一生を圧搾機にかけて搾り尽された彼女はその代償を親達から搾り上げていった」[26]というものがある。一方で、闘争へ向かうプロレタリアートを表現した比喩としては、「俺(おい)らはプロレタリア俺らは機械　俺らはハガネ／俺らは不死身だ」[27]、「同志等よ。君等は機関車。俺等(おいら)は燃料だ」[28]、「この起重機は血がすたつとるやうで／仲間はシャフトやう(ママ)ぬたたかつとる／人間と機械の／あたらすい結合がでけあがるんだ」[29]などの表現を挙げることができる。労働者を使いつぶす比喩として使われていた機械がここでは一転して、理想的なプロレタリアートの姿として描かれていることが確認できる。

---

[25] 明石鐵也「火線――1927 年の兵営生活記録――」『戦旗』第 2 巻第 4 号、1929 年 4 月、p. 170。
[26] 細野孝二郎「雪崩」『戦旗』第 2 巻第 4 号、1929 年 4 月、p. 151。
[27] 田木繁「拷×を耐える歌」『戦旗』第 2 巻第 4 号、1929 年 4 月、p. 34。
[28] 松崎啓次「『三月十五日』に送る歌」『戦旗』第 2 巻第 4 号、1929 年 4 月、p. 37。
[29] 浅見弘「工場は建つ・心臓は敵意にたぎつとる」『戦旗』第 2 巻第 4 号、1929 年 4 月、p. 34。

荒俣宏によれば、20世紀は人工動力と熱力学の発展によって、「疲労」や「消耗」を排除し、燃料の補給さえしていれば運動を持続できる、ということを追求した時代であった。「消耗」するということは資本家にとってもプロレタリアートにとっても恐怖であり、このような共通点は時代性を反映したものとして妥当だろう[30]。

しかし、炭鉱労働の現場においてはこの状況は異なる。小林園夫「出発」において「瓦斯爆発！／炭車テンプク！／ロープ切断！／落盤！／飢餓賃金！／乞食にも劣る掘立小屋！／死が待つてゐる坑夫／俺は坑夫だ」[31]とあり、「二つの行列」、「ガス！」からも看取されるように、炭鉱労働とはそれ自体が多くの事故や過酷な労働環境にさらされる、死に極めて隣接したものとして表現されている。その上でこの詩が導くのは、「何で俺が死を恐れやう！／死を恐れて何が出来やう！／一枚のビラにさへ、俺は俺の命を糊に塗り込む／この一山の兄弟のため／もと／＼俺は坑夫だ／俺が何で死を恐れやう！」というように「消耗」や「疲労」を飛び越えた、死を前提とする捨身の闘争である。プロレタリア文学が炭坑夫をプロレタリアートとして編成する一方で、このような表現からは、資本家側とプロレタリア文学側に共有されるような社会通念が確認される。この点からも「ガス！」におけるダイナマイトの表現の特異性は伺えるものであるが、一方でこの武器は闘争の方向においても効果的に作用する。

3.3. 前衛としての闘争

プロレタリアートとしての闘争を象徴するものとして松田解子「坑内(シキ)の娘」がある。作者は、秋田県仙北郡荒川村荒川（現・大仙市）の三菱経営の荒川銅山に生まれ、本格的な作家活動を始めた当初から、生え抜きの労働者として位置づけられてきた[32]。以下は、松田の荒川銅山に

---

[30] 荒俣、脚注3と同掲書、2000年、pp. 38-39。
[31] 小林園夫「出発」『戦旗』第2巻第6号、1929年6月、p. 56。
[32] このような来歴からも、この詩における労働現場は炭鉱に括られるものでなく、広く鉱山と捉えるべきと思われる。しかし2.1.において述べたような労働の環境やその特殊性は共有されるものであるため、共に取り上げ、考察の一助としたい。

暮らしていた時代の体験を描いたものと解されることの多い詩から、冒頭の引用である。

私達は手子(てご)だ
坑夫の掘出した鉱石を運ぶ
私達は運搬夫、私達は坑内の娘だ。
私達は暗黒の中を雌鷹の様に易々と飛ぶ。
監督も、坑夫も支柱夫も捲挙機械夫も
奈落に導く竪坑も恐れはしない。
ダイナマイトの唸りは私達の心臓に
輝く未来を告げる声だ
　昨日、十三番坑で君坊が死んだ。
　私は其の血を、其の魚肉の様に千切れた肉を、そして岩塊の重圧にむしり取れた髪の毛を見た。なのに私は泣けなかつた。
（中略）
私達は労働者だ。
私達は仲間の死を悲しむ。だが
私たちは其の死骸を踏み越えて
進まなければならない。
（中略）
私達は手を、握ろう。ケージの中、鉱車の蔭で、お互ひに結び付かう。そして
私達の最初の闘ひを宣する日を創らう。
私達は、今日、鉱石を掘出す
だが、その日には
タガネで、ダイナマイトで、何を
打ち砕かねばならないかを

はっきり目論んで進まう‼[33]

鉱山用語で、坑道内を指し示す真っ暗な「シキ」から発せられたこの詩の最終部では、語り手が「闘いを宣する日」を創出するために、ダイナマイトを手にする。「私達の心臓に／輝く未来を告げる声」とされるこの道具は、本来石炭を掘り起こすためにさらなる地底へと向かわせ、坑内で頻発した事故の原因のひとつともなり、十三番坑で起きたという事故により微塵となった「君坊」の遺体の姿とも重なりあうものである。

このような危険と裏表の道具に希望を見出す「坑内の娘」とは、仲間の死を契機に、光の届かない地底を破り、「輝く未来」を掘り出すためにお互いが「束」になろうと、自身を武器としてのダイナマイトに見立てる人々ともいえるだろう。プロレタリア文学において団結を武器とうたうのは、強大な資本と対峙するのに、微細な労働者の力を合わせることが有効かつ唯一の手段と捉えられていたからである。しかし、闘争へ向かう武器としてダイナマイトを選びとるということは、単に炭鉱労働にとって身近なものという理由だけではないだろう。以上の考察から、「機械」や「燃料」といった表現が、機械文明の発展という 20 世紀の時代性を反映し、「持続性」という観点で用いられているのに対し、ダイナマイトとは、使用が一度に限り、「持続性」という利点からは逸脱している。「不死身の機械」と異なり、ダイナマイトに身を模して闘うということは、まさに「闘いを宣する日」を創出するために、死をもいとわない闘争の前衛に立とうとすることにほかならない。

「坑内の娘」においては、初出の『戦旗』1928 年 11 月号の段階では、「母よ！」という小見出しのあとさらに詩が続く[34]。この詩では、工場で働く娘が鉱山で働く老いた母の手を引き、「此の張りこめた搾取網、この堅牢な鉄鎖、／此の狂暴な××をかみ切つて行くのだ。／涙をふけ、／母よ、／私達は今に、すばらしい世界を産み落とすんだ！！」と呼びかけ

[33] 松田解子「坑内の娘」『戦旗』第 1 巻第 6 号、1928 年 10 月、pp. 108-109。
[34] その後刊行された『詩集 辛抱づよい者へ』(松田解子、同人社書店、1935 年)では、連作ではなく別個の作品として所収されている。

る。ここには鉱山という閉ざされた場所から離れ、すでにプロレタリアートとして開かれた場にいる娘が、母に「本当の敵」を教示するという構図がある。詩の中ではわずかではあるが、船上で働く兄に関する記述もあり、母や兄を囲い込む閉鎖的な労働現場を破ること自体がプロレタリアート全体の闘争における一役を占め、社会変革のための新たな地平を拓くことが示唆されている。

4. おわりに

本稿で取り上げたプロレタリア文学の言語表現では、炭鉱と炭坑夫を編成するために、隔絶された現場と労働が鳥瞰的な視野の下、抽象化され提示されている。そしてその編成自体は、共同体の未来の創出のため自身の生を賭けて闘争しようとする前衛に、炭坑夫を組み込もうとすることといえる。

その労資関係を解決しようとする時、しかし炭坑夫はプロレタリア文学の抱える「難問」を体現してしまう存在であった。この点に加えて、プロレタリアートとしての炭坑夫がどのような役目を担うものとして希求されていたかという点は留意されるべきであろう。炭坑夫を包括して新たに生成されようとするプロレタリア文学運動とその表現、またプロレタリア文学によって生成され始めた炭坑夫の姿の互いを考察するために、上述の点を注記として挙げたい。

そして今回取り上げた作品には、映画の技法やダダイズムなど世界的な前衛芸術との関連が伺えるものであるが、調査の行き届かなかった点も多い。『戦旗』という誌上においては、グラビア記事や表紙、挿絵のような視覚的表現を横断して、そこに包括される読者共同体にプロレタリアートとしての炭坑夫が提示される意義を考察することが必要とされるだろう。「母よ！」において、兄の労働現場として触れられるように、鉱山のほかにも海上労働のような社会から隔絶され、また他国の労働と通じるような現場が存在していた。プロレタリア文学運動が世界的な視野を持って進められていたことからも、炭鉱や広く鉱山での労働に加え、上述のような労働現場の表現を探ることによって、プロレタリア文学運

動総体を検討しなおすことを今後の展望とする。

【付記】

引用に際し適宜漢字は現行のものに改め、傍点・ルビは省略したが、『戦旗』からの詩の引用は初出のままとした。また参照したのは、すべて、1976年に戦旗復刻版刊行会から発行された復刻版である。